

個性の異なる2つのカスタムモデル

金管楽器の一つで、一般に知られるものは多くのトランペットやコルネットと同じB \flat （変ロ調）管のフリーゲルホルン。専門の奏者は少なく、トランペット、コルネットと持ち替えて吹かれることが多いが、柔らかく深い響きの音色は唯一無二の魅力がある。

幅広いジャンルで吹かれるヤマハのフリーゲルホルンのなかで、第一線で活躍するプロの奏者も愛用するカスタムモデルが、昨年12年ぶりにモデルチェンジを実施。トランペット界の巨匠であるボビー・シュー氏が監修する「YFH-8310Z」と、ビッグバンドなど幅広いフィールドで活躍するウェイン・バージェロン氏が監修する「YFH-8315G」の2つのモデルが、ヤマハの最新技術と工法によって大きく進化を遂げた。

モデルチェンジの発端は、2018年にボビー氏監修のトランペットをモデルチェンジした際、開発担当だった和田幸平さんが新たに設計したバルブケーシングにある。

「新設計のバルブケーシングを搭載したトランペットは、ボビーさん、ウェインさんをはじめとする多くの奏者から支持を得ることができました。そうした背景から『同じ技術、工法を使ってフリーゲルホルンのバルブケーシングもつくりたい』という声上がり、今回のモデルチェンジにつながりました。



ボビー・シュー
世界的なジャズトランペット奏者でありフリーゲルホルン奏者。名だたるビッグバンドのリードプレイヤーからソロまでこなす実力者であるとともに、教育者としても多くのトランペット奏者に影響を与えている。



ウェイン・バージェロン
アメリカ西海岸を代表するスタジオプレイヤー。著名なアーティストのレコーディングや映画のサウンドトラックなどに参加し、多彩な音楽を手がける。ビッグバンドのリードトランペット奏者としても活躍。

なおフリーゲルホルンとトランペットではピストンの仕組みが異なりますが、バルブケーシングで吹奏感や音色の方向性を揃えることで、2つの楽器の持ち替えがよりスムーズになることは重要と考えました」と語るのは、トランペットとともにフリーゲルホルンの開発を手がける和田さん。

新設計のバルブケーシングの優れた点は、剛性の高さ。奏者が吹き込む息を管体がしっかり支え、効率良く音に変換することで、粒立ちの良い音が鳴るといふ。

「フリーゲルホルンは柔らかい音色が特徴ですが、柔らかすぎると音の輪郭がぼやけてしまい、ピッチ（音の高さ）を合わせにくくなります。今回のモデルチェンジではバルブケーシングの剛性を上げることで、柔らかさのなかにも芯のある音を実現することができました」（和田さん）

パーツの素材、形状が楽器の個性を際立たせる

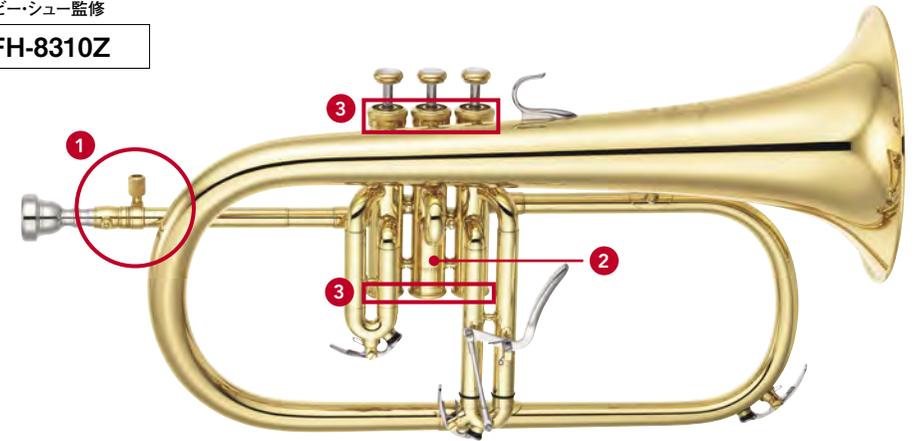
開発の方向性を決めたポイントの一つが、バルブケーシングのトップキャップ・ボトムキャップの仕様の変更だ（右ページ参照）。

「バルブケーシングだけでなく、キャップの仕様も変えることで吹奏感や音色にどう影響するかは未知数でした。まずは試作品をつくってボビーさん、ウェインさんに試奏してもらい、判断を仰ぐしかないと思い、キャップの仕様を変えないもの、キャップをはめる管の部分のサイズ（直径）を広げたものなど1モデルにつき4種類（2つのモデルで8種類）つくり、評価がいちばん高かったものをベースに開発を進めました」（和田さん）

2つのモデルは同時に開発が行われ、発売も同日だが、音色や吹奏感などの特徴は大きく異なる。

2つのモデルを進化させたポイント

ボビー・シュー監修
YFH-8310Z



1 リードパイプスクリュー

リードパイプを固定するためのスクリュー（ネジ）は、操作性の高い倭型の形状に。「YFH-8310Z」は音色がより柔らかくなる真鍮製で、さらに中心部をくりぬくことでよりフリーな吹奏感を実現。「YFH-8315G」はフォスファープロンズ製で、サイズアップして重量を上げることで、音色の存在感と高音域のきらびやかさを際立たせている。



2 バルブケーシング

楽器の心臓部といわれ、吹奏感や音色に大きく影響する重要なパーツ。素材、加工精度の改良を重ねた新設計のバルブケーシングは、剛性の向上により、息を吹き込んだときの心地よい抵抗感、レスポンス（反応）の良さを実現。ジャズにおいて重要なハイノート（高音域の音）も、芯のある粒立ちした音を鳴らすことができる。



ケーシングをつなぐ支柱も改良した。

3 トップキャップ・ボトムキャップ

バルブオイルを差すときなど、日々の手入れで着脱するトップキャップとボトムキャップ。キャップの内側のネジの仕様を変更し、キャップをはめる管の部分の直径をわずかに広げることで、取り外し・取り付けがしやすくなっている。

ウェイン・バージェロン監修
YFH-8315G

